



草屋根の秘密

――東南アジア・オセアニアの住まい

◎写真と文 佐藤浩司 Koji Sato

イフガオ Ifugaoはフィリピン、 ルソン島北部の山岳地帯に居住 する民族。視界のおよぶかぎり の山あいを棚田につくりかえ、 その人工自然のただなかで身を 寄せ合ってくらしている。その 住まいは四本の柱にのった日本 の高倉そのもの。







インドネシア・スンバ島 Sumba の集落。巨大な尖り屋根をもつスンバ島でも、屋根をささえる4本の柱には高倉の名残の鼠返しがある。ただし、屋根裏に収納されているのは米ではなく氏族を象徴する祖先伝来の神器で、この家の主人公は屋根裏にやどる祖霊のほう。住人たちはその床下に間借りしている格好だ。









上:4本柱にのるイフガオの家屋。 中/下:イフガオと踵を接してボントック Bontokの地がある。おなじ棚田を築きな がら高床住居をもたない東南アジアでも異 色の民族。ところが、彼らはいったん建設 した高倉構造を壁でかくして、わざわざそ の床下でくらすのである。

1. ボントック (ルソン島)

- イフガオ (ルソン島)
- 3. サダン・トラジャ(スラウェシ島)
- 4. ブナッ (ティモール島)
- 5. アトニ (ティモール島)
- が一、ケイと
 サヴ (サヴ島)
- 7. リオ (フローレス島)
- 8. マンガライ(フローレス島)
- 9. スンバ (スンバ島)
- 10. ミナンカバウ(スマトラ島)
- 11. トバ・バタック (スマトラ島)
- 12. カロ・バタック (スマトラ島)
- 12. カロ・ハタック(スマト 13. ニアス(ニアス島)
- 14.バナ (ベトナム)









インドネシア・ティモール島アトニ Atoniにある一本柱の儀礼家屋。中心にたつ聖柱には祖先の遺品がとりつけられている。アトニには、首長の権威の象徴として蜂の巣状の長大な屋根の高倉がある。現在の家屋はこの高倉構造をそのまま小さくしたもので、儀礼家屋にのこる1本柱構造はふるい家屋形式の遺風かもしれない。



フローレス島でも西部に住むマンガライ Manggaraiの家屋はめずらしい円錐形の 高床住居。ひとつの建物に10数世帯が生 活する。屋根のなかは幾層にもわたるト ーモロコシの保管庫になっている。



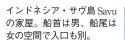
インドネシア・フローレス島リオ Lioの家屋。家屋のなかにはさまざまな禁忌がはりめぐらされている。屋根の棟には祖霊がやどると信じられ、屋根裏をまともに見あげることさえしてはならないのだ。

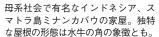






インドネシア・スマトラ島カロ・バタッ ク Karo Batakの集落。日本の竪穴住居をおもわせる巨大な高床住居には8世帯が共 同で生活する。







集会所をかねた米倉と家屋が向き合って ならぶトバ・バタックの集落。船のよう にはりだした屋根の中はがらんどう。







サダン・トラジャでは船は祖先が乗ってきた乗り物で、 死者の霊魂はふたたび船に乗せられて祖先の国にもどる と考えられている。ティモール島のブナッやサヴ島では、 家屋は船首と船尾をもつ船にたとえられる。





インドネシア・ティモ ール島ブナッ Bunaq の家屋。外壁をおおう 乳房と迷路の彫刻は豊 穣と永遠のシンボル。





草屋根の秘密

―東南アジア・オセアニアの住まい

[写真·文] 佐藤浩司 Koji Sato



スンバSunbaの集落

かえって私たちに住むことの意味を問いかけて まいの常識からあまりにかけはなれた造形は、 大地の力学を無視してはげしく反り返る屋根。住 た。摩天楼さながらに天空めざしてのびあがり、 ほど個性的でなければならない理由を知りたかっ でも生きるうえで必要な装置が、民族ごとにこれ そこにあったせいだ。住まいという、人間がだれ かけは、とびぬけてユニークな木造建築の伝統が 東南アジアに足を踏み入れるようになったきっ

忌の網の目が縦横にはりめぐらされていた。男と ぎていないだろうか。家屋の空間には、規則や禁 私たちの文化は住むことに対して頑なになりす

うか?

と訴えかける造形を人間たちはつくりあげていた。 とげるように、 間たちのいとなみが、その結果として積みかさね わすだろう。それは、この土地に生きた無数の人 おしえてくれる。 つくる雄鶏やせわしない犬の吠え声が、この地に びく杵の音、洗い場の水音、子どもの歓声、 ひろがる村の存在を告げている。リズミカルにひ てきた風景。動物が種ごとに異なる巣作りをなし すぎれば、目的の村は忽然と視界にその姿をあら しだいに近くなる生活の息吹が密林の向こうに 人間たちのドラマが繰り広げられてきたことを 人間さえも自然の一部にすぎない 鬱蒼と生いしげる木立をひとつ

小路に追い込んでいるようにみえる。 たちは失っている。それは私たちの住まいや、 屋のなかにあることを許容するゆとりをいまの私 ささげられていた。それらの存在といかに折り合 家屋のもっともたいせつな場所は人間以外のもの 最大の目的ではないのかもしれない。往々にして、 ど規範にしばられた空間が彼らの社会をささえて てさえ家のなかでは峻別されてゆく。理不尽なほ いては私たちの住環境そのものを逃げ場のない袋 ーマだった。人間の意のままにならない空間が家 いをつけてゆくかが、住むという行為の最大のテ いた。ことによると、 いった人間関係が、日常の立ち居振る舞いを通じ -祖先の霊魂だったり、穀物だったりしたが―に 人間が住むことは住まいの S

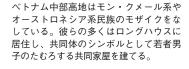
いは肝心の役割を十分満足に果たしているだろ 割だったのかもしれない。私たちの手にした住ま たえてくれることが、住まいの一番たいせつな役 けではない。私たち自身もまた否応なくそうした が新石器時代の竪穴住居から大きく変化したわ 肉体をかかえて生きてゆくという人間行動の内実 る時代になっても、住むこと、つまりは、生身の 人間のひとりでありつづけること、その実感をあ 部屋にいながらにして世界中の情報が手にはい 目的の村はもう目と鼻の先まできている

大人と子ども、 目上と目下、身内とよそ者と

さとう・こうじ●1954年、東京都生まれ。国立民族学博物館助教授。民族建築学。東 南アジア・オセアニアの居住様式に関する比較研究を進める。編著書に『住まいにつ どう||「住まいはかたる」「住まいにいきる」「住まいをつむぐ」(学芸出版社)など。









36

上左:ベトナム中部高地コントゥムに住むバナ Bahnarの共同家屋。 上右上:レンガオ Rengaoの共同家屋。

上右下:セダン Sedangの共同家屋。

